

# 博士学位論文 概要

語彙研究による対人特性の構造の研究

橋本泰央

## 第 1 章 序論

本論文では日本人の対人特性を構造化し、その特徴を明らかにすることを全体の目的とする。

対人特性は包括的パーソナリティ特性に包含される、パーソナリティ特性の一側面であり、人を特定の対人行動へと向かわせる傾向性といえる (Wiggins, 2003)。それゆえ対人特性は対人関係や対人問題とも関連すると考えられている。

対人行動や対人特性は「支配性」と「親密性」を 2 軸とする円環構造で表現できると考えられている。対人行動研究や対人特性研究の歴史においては支配性と親密性と解釈可能な 2 つの次元が繰り返し見出されてきた。また対人行動や対人特性を構成する変数が 2 つの次元で表現される平面上に円環状に配列されることも示され、かつ、同様の 2 軸および円環構造がさまざまな言語における語彙研究から明らかとなっている。つまり、対人行動や対人特性を表現した円環構造は言語を越えて人間に普遍的にみられる可能性が示唆されている。

対人特性は対人行動の特徴や対人関係のあり方の指標として活用され、法則定立的ネットワークとして心理学的構成概念同士の整理に役立っている。また外的基準の 1 つとして理論研究にも利用されており、人間の行動を記述し、理解するための 1 つの概念として活用されている。

しかし、日本においては対人特性の研究自体が少なく、日本人の対人特性を包括的に捉えようとした試みもほとんど行われていない。そこで本論文では日本人の対人特性を構造化し、その特徴を明らかにすることを全体の目的として以下の 3 点を取り上げる。

1 点目は海外で利用されている対人円環尺度を翻訳し、日本で活用できるようにすることである。共通の物差しを利用することは、海外で積み上げられている知見を活用することにつながり、対人特性研究の活性化に寄与すると考えられる。また、尺度の翻訳は、海外の知見を利用して日本人の特徴を明らかにすることに寄与し得るだけでなく、日本人サンプルを対象に得た知見を海外の研究者が利用しやすくなることにも繋がると思われる。

2 点目は語彙研究によって対人特性語の構造を明らかにすることである。海

外尺度の翻訳は、海外で作成された視点で日本人の対人特性を測定するという意味で「etic」(Pike, 1966)な視点(外部から持ち込んだ枠組みで、あるシステムを捉えること)からの研究である。それに対して語彙研究では、日本語の対人特性語を扱う。語彙研究は日本語の中から対人特性語を拾い上げ、対人特性語の構造を探ることで日本人の対人特性の構造を浮かび上がらせようという「emic」な視点(あるシステムを、その内部から捉えること)に立つ研究と言える。「emic」な視点に立つことで、翻訳尺度では捉えることのできない、日本固有の特徴を捉えることができると期待できる。

3点目は対人特性尺度の構成である。尺度化によって概念を捉えやすくなり、対人行動や対人関係を捉える枠組みの1つとしての活用可能性が広がると考えられる。

一連の研究は大きく3つに分けられる。1つは第2章で報告する、海外の対人円環尺度の翻訳とその信頼性と妥当性を検討した研究([研究1・2・3])、2つ目は第3章と第4章で報告する、対人特性構造を探る語彙研究([研究4-7])、そして3つ目が第5章で報告する、対人特性尺度の構成を目指した研究([研究8-13])である。第6章ではこれらの研究から得られた結果を整理し、総合的に考察し、今後の研究課題を述べる。

## 第2章 対人特性尺度の翻訳と妥当性検証

第2章では32項目で対人特性を測定するIPIP-IPC(Markey & Markey, 2009)を翻訳し、IPIP-IPC-Jを作成した。

[研究1]では、大学生と短大生625名を対象に、IPIP-IPC-Jの円環構造の検証を行った。確認的因子分析の結果から8つの下位尺度の内的整合性が示された。5週間隔で実施された調査からは、IPIP-IPC-Jが原版とほぼ同程度の再検査信頼性を持つことが示された。主成分分析の結果、8つの対人特性が2つの主成分を軸とする平面上に円環状にプロットすることが視覚的に確認された。さらに下位尺度間の相関行列を利用した分析からは、8つの下位尺度が円環構造を示すことが統計的にも支持された。

第2節の[研究2]では、大学生と短大生521名を対象に、2つのBig Five

尺度（並川他，2012；小塩・阿部・カトノーニ，2012）を用いて妥当性の検証を行った。IPIP-IPC-J との相関分析の結果，「群居的」対人特性が外向性と，「温和」な対人特性が協調性と最も強く関連することが明らかとなった。外向性と協調性を IPIP-IPC-J 平面上に布置すると，先行研究から予想された通り，外向性は支配性(+)，親密性(+)の領域に，協調性は IPIP-IPC-J の支配性(-)，親密性(+)の領域に布置されることが示された。

第3節の〔研究3〕では，大学生と短大生390名を対象に，Dark Triad（田村・小塩・田中・増井・ジョナソン，2015）や友人関係（岡田，1995），アサーション（村山他，1991）を測定する尺度を用いて，IPIP-IPC-J との関連を検討した。その結果，Dark Triad のマキャベリアニズム，サイコパシー傾向，自己愛傾向は予測通り IPIP-IPC-J の「傲慢」と関連し，IPIP-IPC-J 上では支配性(+)，親密性(-)の領域に布置されることが示された。友人関係尺度との関連からは，「温和」「群居的」「自信過剰」な対人特性が友人達といつも一緒にいることを好む友人関係と，「謙虚」「温和」な対人特性が友人を傷つけないように気を遣う友人関係と，「冷淡」「孤独」「自信のない」対人特性が深い関わり合いを避ける友人関係と関連することが示された。またアサーション尺度との関連からは，「孤独」「自信のない」対人特性が自己主張の抑制と，「自信過剰」「傲慢」「冷淡」な対人特性が攻撃的な自己主張と関連することが明らかとなった。これらの結果はいずれも IPIP-IPC-J の妥当性の証左と考えられた。

以上の研究から IPIP-IPC-J の円環構造と信頼性，妥当性が示され，我が国においても対人特性が円環構造をとりうる可能性が示された。

### 第3章 語彙研究による対人特性語の抽出

### 第4章 対人特性語の構造の検討

第3章と第4章では，語彙研究によって対人特性語の構造を探り，日本語に基づいて対人特性語の構造を明らかにすることを目指した。

第3章第2節の〔研究4〕では，大学生5名の協力のもと，広辞苑第六版（新村，2008）と大辞林第三版（松村，2006）からパーソナリティ表現用語

を抽出した。その結果、広辞苑からは 1302 語、大辞林からは 1515 語、重複を除いて 2461 語が収集された。

第 3 章第 3 節の〔研究 5〕では、代表的対人特性語の選定を目指して、2461 語の絞り込みを行い、最終的に 949 語を代表的パーソナリティ表現用語として選別した。

第 3 章第 4 節の〔研究 6〕では、代表的パーソナリティ表現用語の中から対人特性語を選別した。「彼は（わたしは）人に対して〇〇（な人）だ。」のような刺激文が〇〇に入れる品詞に合わせて 5 種類作成され、特定のパーソナリティ表現用語を〇〇に当てはめた際に刺激文が日本語として自然な場合に、その用語を対人特性語とみなした（全体の回答者に占める、適切と回答したものの割合を適切率とする）。その結果、パーソナリティ表現用語のうちの一定割合が対人特性を表現すること、対人特性語は各品詞から一定の割合で抽出され得ることが示された。

第 4 章の〔研究 7〕では、〔研究 6〕で明らかとなった対人特性語としての適切率をもとに選出した 339 語を使用して、対人特性語の構造を検討した。719 名の大学生が調査に参加した。自分に当てはまる（もしくは当てはまらない）と回答した割合（是認率）が 25%未満、もしくは 75%より大きかった 80 語は社会的望ましさを反映していると考え、分析から除外し、259 語を対象に主成分分析を行った。その結果、第 1 主成分と第 2 主成分（累積寄与率 70.1%）で表現される平面上に 259 語が円環状に分布する様子が観察された。

## 第 5 章 対人特性尺度の構成

第 5 章の〔研究 8〕から〔研究 13〕では、対人特性尺度の構成を目指し、信頼性や妥当性の検証を行った。

第 1 節の〔研究 8〕では、〔研究 7〕のデータをもとにクラスター分析を行い、対人特性語のグルーピングを行った。Gap 統計量（Tibshirani, Walther, & Hastie, 2001）をもとにクラスター数を 7 と 8 に指定し、k-means 法でそれぞれクラスタリングを行った結果、7 クラスターの場合には平均 37 語（18－47 語）が、8 クラスターの場合には平均 32 語（18－43 語）が各クラ

スターに分類された。

第2節の「研究9」では対人特性尺度の構成を目指した。対人特性語のまとまりを決定するために「研究8」で見出された7クラスターから10語ずつ、8クラスターから10語ずつを選び、重複を除く88語を対象に改めてクラスター分析を行った。その後、決定された各クラスターとBig Five（小塩・阿部・カトロニー，2012）、Dark Triad（田村・小塩・田中・増井・ジョナソン，2015）、対人葛藤方略（加藤，2003）、IPIP-IPC-J（橋本・小塩，2016）との関連を検討した。その結果、対人特性語は8クラスターに分類され、各クラスターには外的基準との関連から以下の名前がつけられた。12時の方向から反時計回りに「自己主張的」「自己中心的」「冷淡」「内向的・受身」「謙虚」「温和」「友好的」「社交的」の8つである。「自己主張的」と「内向的・受身」を結ぶ軸が支配性に、「温和」と「冷淡」を結ぶ軸が親密性に相当すると解釈された。海外の対人円環と異なり、支配性（－），親密性（－）の領域が空白となり、支配性（＋），親密性（＋）の領域が「友好的」と「社交的」によって細分化された（Figure 1）。

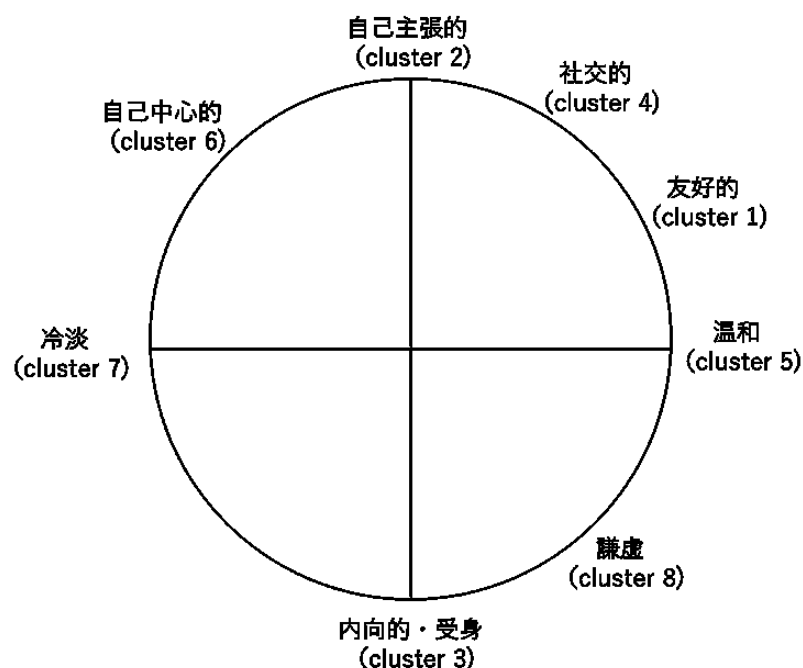


Figure 1 語彙研究から得られた対人特性の円環モデル

第3節の「研究10」では対人特性尺度短縮版の構成を目指した。8クラスターから数語ずつを抜き出して複数の短縮版を作成し、「研究9」のデータを用いて外的基準との相関パターンを比較した。

第4節の「研究11」では、対人特性尺度短縮版の再検査信頼性を検討した。「研究9」と4週を空けて行われた「研究11」の両方の調査に参加した大学生139名が対象となった。それぞれ対応するクラスター得点間の相関係数の平均は  $\alpha = .77$  (.70 - .86) で、対人特性尺度短縮版が一定の再検査信頼性をもつことが示された。

第5節の「研究12」では対人特性尺度短縮版の妥当性検証の一環として、HEXACO (Ashton & Lee, 2009; Wakabayashi, 2014) との関連、および「仲の良い友人の数」「知人と飲み会（ごはん）に行く回数（1か月あたり）」「現在所属しており、頻繁に稼働している LINE グループの数」との関連が検討された。大学生193名が参加した調査の結果、HEXACOの外向性は予想通り、対人特性の社交的、自己主張的と最も高い相関を、内向的・受身と最も低い相関を示した。協調性は温和と最も高い相関を、冷淡と最も低い相関を示した。この結果は対人特性尺度短縮版の妥当性を支持する結果であった。また、社交的、友好的な対人特性が「仲の良い友人の数」や「飲み会（ごはん）に行く回数」と正の相関をみせたことも対人特性尺度短縮版の妥当性の証左と考えられた。

第6節の「研究13」では大学生の SNS との関わり方との関連を検討することで、各対人特性の特徴の描写を試みた。LINE 尺度（時岡他, 2017）と対人特性尺度短縮版で構成された質問紙に大学生87名が回答した。その結果、LINE 上での「攻撃性の増加」と自己中心的、冷淡な対人特性の関連が明らかとなり、対人特性がオンライン上でのやりとりにも敷衍される可能性が示された。また LINE の「既読無視への不安」と自己中心的、冷淡な対人特性との関連が示され、「既読無視への不安」を引き起こす要因として他者との親密な関係性を求める気持ち以外の要因があり得ると示唆された。

## 第 6 章 総合考察

本論文の成果は以下の通りである。

1 つ目の成果は、海外で作成された対人円環尺度を翻訳し、信頼性と妥当性を備えた尺度を構成したことである。作成した翻訳尺度を用いることで、海外で蓄積された研究知見との比較研究が可能となる。さらに、日本人を対象として得られた知見を海外の研究者が利用しやすくなるという側面も併せ持つ。つまり尺度の翻訳とは、海外で作成された枠組みを日本に「輸入する」という方向性だけでなく、日本国内で得られた知見を海外に向けて「輸出する」という、双方向的な意味を持つのである。双方向的な研究のやり取りが、世界に占める日本の位置づけを明らかにし、日本人の対人特性の特徴を相対化して捉えることにつながると考えられる。

2 つ目の成果は、対人特性を捉える枠組みとして、先行研究同様の作動性と共同性に包含されると解釈可能な 2 つの次元を語彙研究によって見出したことである。この成果には 2 つの意味がある。1 つは作動性と共同性という概念が、対人行動を捉える枠組みとして有効であるとする先行研究に、妥当性の根拠を 1 つ加えたという意味である。もう 1 つは、日本人の対人特性を捉える上で、作動性に包含される概念の中でも「自己主張的」（対「内向的・受身」という軸の有効性を提案したという意味である。

3 つ目の成果は、対人特性の構造が先行研究と同じく円環構造で表現可能なことを示したことである。語彙研究に基づいて対人特性を 8 つのグループにまとめ上げ、それらが海外と同様の円環構造を構成することを示した点、そして個々の変数に命名し、対人特性を捉える詳細な視点を提供したことが 3 つ目の成果の意味である。

今後の主たる研究課題は、語彙研究に基づいて構成された対人特性モデルについて、検討を重ねていくことである。

第 1 に、実際の対人相互場面でモデルの妥当性を検討する必要がある。もともと対人特性は他者との相互作用場面でみられる行動と関連するパーソナリティを捉えた概念であり、ただ「個人」の行動を捉えたものとは区別される。本論文の研究は質問紙による調査にとどまっているため、人と人との相互作用場



面で実際に活用し得るものか検討が必要である。

第2に、現実場面での行動指標との関連を検討する必要がある。本論文の研究では「仲の良い友人の数」や「飲み会（ごはん）に行く回数」「LINE グループの数」といった指標との関連しか検討することができなかった。しかし、特定の対人行動が本論文で構造化した対人特性と関連を持つことが明らかとなった。これまでに論じた一連の研究は構成概念同士の比較検討にとどまった嫌いがある。今後、対人特性がどのような行動と関連するのかを検討することで、対人行動に対して対人特性が果たす役割をより深く理解することにつながると考えられる。

第3に、相互作用する2者関係と対人特性との関連を検討することである。Sullivan (1953 中井・宮崎・高木・鑑訳 1990) が指摘したように対人特性がその人の築き上げてきた他者との関係性の蓄積だとすれば、対人特性は対人関係のあり方と関連すると思われる。我々は身近な人間関係でも、親子関係、友人関係、恋人関係、上司と部下など、さまざまな関係性の中で生活している。それらの関係性に対して対人特性はどのように関連しているのか、相補性の原理の検証も含め、課題は多い。さらに、相互作用する相手との関係性に応じて対人行動を捉える枠組みを使い分けているのか、あるいは共通する枠組みで捉えているのかも興味深い問題である。先行研究では子どもを観察対象とした場合には、大人の時とは異なる枠組みが見出されている。枠組みの違いは、ある人間関係において重視する側面の違いを表すと考えられる。枠組みの違いを知ることは、それらの関係性の背後にある、社会の特徴を知ることにもつながると考えられる。

第4に、「温和」な対人特性と「友好的」対人特性の違いを様々な変数との関連から検討することである。他のパーソナリティ変数との相関パターンを見る限り、2つの対人特性は類似しており、2つの対人特性として独立させる意味がどこまであるかを検討することは今後の課題である。仮にこの2つの対人特性を区別することが重要であるならば、2つの違いはどのような面に現れてくるのか、今回検討しなかった他のパーソナリティ変数との関連や、現実場面での行動指標との関連などを検討する必要がある。こうした検討は、対人場面における日本人固有の行動特徴を知ることにつながると期待できる。

## 引用文献

- Ashton, M. C., & Lee, K. (2009). The HEXACO-60—A short measure of the major dimensions of personality. *Journal of Personality Assessment*, 91, 340-345.
- 橋本泰央・小塩真司(2016). IPC に基づいた IPIP-IPC-J の作成. *心理学研究*, 87, 395-404.
- 加藤司(2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について. *社会心理学研究*, 18, 78-88.
- Markey, P. M., & Markey, C. N. (2009). A brief assessment of the interpersonal circumplex: The IPIP-IPC. *Assessment*, 16, 352-361.
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・田中克江・田村隆一 (1991). 精神的健康に関する研究—アサーション尺度の改訂と分析— *健康科学*, 13, 97-103.
- 松村明 (編) (2006) . 大辞林第三版 三省堂
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 *心理学研究*, 83, 91-99.
- 岡田努(1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 *教育心理学研究*, 43, 354-363.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ, ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み *パーソナリティ研究*, 21, 40-52.
- Pike, K. (1966). *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. NL, Hague: Mouton.
- 新村出 (編) (2008) . 広辞苑第六版 岩波書店
- Sullivan H. S. (1953) . *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York: W. W. Norton & Company.
- (サリヴァン H. S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑑幹八郎 (訳) (1990) . 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- 田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソン, ピーター カール (2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み *パーソナリティ研究*, 24, 26-37.

- Tibshirani, R., Walther, G., & Hastie, T. (2001). Estimating the number of clusters in a data set via the gap statistic. *Journal of the Royal Statistical Society: Series B (Statistical Methodology)*, 63, 411-423.
- 時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里…岩城晶子(2017). 高校生の LINE でのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 26, 76-88.
- Wakabayashi, A. (2014). A sixth personality domain that is independent of the Big Five domains: The psychometric properties of the HEXACO Personality Inventory in a Japanese sample. *Japanese Psychological Research*, 56, 211-223.
- Wiggins, J. S. (2003). *Paradigms of personality assessment*. New York: Guilford Press.